



死産子数を抑えるための良好な管理

分娩前と分娩中の適切な管理が死産子の発生に大きな影響を与えます。1 腹当りの死産子数を 0.3 頭減らすのは多くの農場で比較的簡単に達成できます。ここでいう死産子とは分娩の過程において臍帯を通した胎盤からの血流が子宮の構造に制限、もしくは断絶されて無酸素症になり、分娩中に死亡したものと定義します。死産率に影響する因子はたくさんありますが、ほとんどが母豚と分娩過程に関連しています。産歴が最も大きなファクターであり、死産子は 2 産目から徐々に増加して、6 産以上で最も多くなります。また、産子数の多い母豚で死産子が増える傾向があり、さらに産歴が増えるにつれてリスクが増加します。

死産率は分娩にかかる時間と密接な関係があり、ほとんどの母豚が 2-3 時間で分娩するのに対して 2-5 時間の範囲で起こります。分娩時間が長くなると臍帯の血流は時間がたつにつれて阻害されるので死産子数が増加します。

その次には分娩ステージが関連し、終盤に娩出される子豚ほどリスクが高まります。多くの場合に死産子は最後から 3 頭の分娩で起こり 70% に達する場合もあります。

分娩管理の時に最も効果的に時間を使うためには、死産子が最もでそうな母豚(産次や過去の産歴を元に判断する)を特定し、分娩カードに記載するとよいでしょう。こうする事でリスクが最も高い母豚により大きな注意を払うことができ、効果的に管理できます。

分娩観察

分娩の観察が死産率の改善の基本ですが、これを効率よく実践するためには分娩誘発の必要性が高まるでしょう。分娩誘発を実践する前に、自然分娩するまでの妊娠期間の平均を豚群全体と産次ごとに分けて調べておきましょう。これは農場によって違う場合が多いです。生時体重を最大にするために、誘発は平均の妊娠期間より早過ぎないようにしなければなりません。

その他の因子

分娩過程の管理そのものに加えて、餌の管理や環境も死産子数に影響します。

分娩前の 3-4 日間における飼料の過給は死産子数の増加につながるため、経産の母豚には 1 日 2 kg、未經産豚では 1.8 kg に餌を減らすようにした方が良い場合があります。

母豚が不快に感じるほどの高すぎる分娩室の温度も死産子数の増加につながるため、分娩室の温度はできるだけ 21-22 の範囲にします。

母豚がストレスや不快に感じる状態になることは死産子数の増加につながります。特に重要な事は、母豚の分娩中はスタッフが静かに落ち着いて行動する事です。物音や騒々しさは分娩中の母豚にストレスを与えます。



分娩観察のガイドライン

分娩管理の実践が死産率を最少化させることにつながります。

分娩が始まったら母豚を静かに観察し、観察するたびにその時間と生存産子数、死産子数を分娩カードに記入しよう。普段から分娩行動をよく観察し、異常をすばやく発見して対応できるようにしましょう。

分娩の初期段階においては母豚が難産や不快そうな様子をしめしていない限りはほとんど介護の必要はないので、そっとしておきましょう。

6-7 頭の子豚が産まれた後、子豚の産まれる間隔が 20 分以上になるか死産子が生まれた場合に介護するようにしましょう。これは必要があれば、経験に基づいて時間を変更してもかまいません。

母豚の介護をする時には陰部周辺を温かいお湯と刺激の少ない殺菌剤で洗浄し、腕まで覆うプラスチックの手袋に産科の潤滑剤を使用するなど良好な衛生状態で実践しましょう。看護を行う場合には農場の治療方針に則った長期持続型の抗生剤を注射しましょう。

黄-茶色の胎便または糞が子豚を覆う胎膜についていないか観察しましょう。これらは子宮の中で子豚から酸素が奪われると排出されます。もしこれらが見つかったら、問題が発生してすぐに母豚を看護する必要があるといういい目印になります。

母豚の看護をする時には、届く範囲内の子豚は全て注意深く取り出さなければなりません。子豚を包む胎膜を取り除き、必要があれば呼吸を補助してヒートランプの下に寝かせ、後で初乳の吸引を補助します。

分娩に時間がかかり過ぎていたり、母豚の陣痛が止まった場合には子宮頸が詰まっていないことを確認してから、子宮の収縮を促進するためにオキシトシンを少な目に使用します。最大の用量は 0.5ml または 5IU を筋肉内に投与しますが、農場の獣医師の指示があった場合には陰部に 2.5IU する場合もあります。オキシトシンは必要があれば 20 から 30 分間隔で投与します。しかし、オキシトシンの用量が多すぎると子宮が締めまりすぎてしまい、死産子数がより多くなります。

母豚の看護が終わったら、分娩が完全に終わるまで注意深く観察し、必要があれば再度看護しましょう。

これらの方法で死産子数が減少すると生存産子の生存率も増加します。これは子豚の活力を下げる低酸素症が減少するためです。死産子率を低く抑えると、離乳前の死亡率も抑えられるでしょう。